

東京の教育

復刊第三号

東京都教師会発行

(事務局) 横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三〇

日本神話における「高天原」の訓読の 転訛に関する研究(1)

松浦明博

『古事記』編纂者(筆録者)には、「高天原」の訓読に関し、『高』の下にくる「天」はアマと訓ぜよ。これより後はこれに倣え(従え)』との明確な指示(訓注)が存する。筆者は、「日本神話における高天原の訓注の解釈および訓読の転訛に関する研究」(『大月短期大学六十周年記念論集』所収)において、この点に改めて注目するとともに、その転訛について明らかにし、教育現場における歴史教育・神話教育等への関連について考察した。日本神話の中で特別な意味を持つ「高天原」について理解を深めることは、「日本神話とは何か」との問いに極めて重要な示唆を与えることになることとなる。

平成十三年度扶桑社版『新しい歴史教科書』では、戦後の歴史教科書において初めて日本神話が記載された。次いで平成二十八年四月からの使用の中学校歴史教科書では、なんと全社が日本神話に関して大コラム又は小コラムを設け説明している。特に、東京書籍、教育出版、清水書院、自由社、育鵬社は二頁大コラムを設けて取り上げている。うち、

四社で「高天原」の用語を見出すことができる。自由社以外はいずれも「たかまがはら」とルビがふられていた。日本の歴史学の通説に従ったものであろう。ところが驚くべきことに、新版の自由社の歴史教科書では、計六箇所を高天原の語句が登場し、うち三箇所には簡所に高天原の語句が登場し、うち三箇所には「たかあまはら」と表記されているのである。新版の自由社歴史教科書は、文部科学省の教科書検定を通過し、市販本も市場に広く流通しており、「たかあまはら」と訓ずることの正当性については、公的にも認められたと考えることができる。しかし、歴史学や歴史教育においては、「たかまがはら」との読みが通説である。筆者は、教育者として研鑽を積む中で、生徒や学生たちに、わざわざ「たかまがはら」と訓読させる事に、いささかの疑問を感じた。どうして「天」を「あま」あるいは「あめ」と訓ぜず、「まが」と矯正するのか。果たして如何なる根拠に基づいているのか。ほどなく、国文学の分野では、「高天原」は、「たかまがはら」ではなく、「たかまのはら」と訓読することに統一されていることを学んだ。

高天原の訓みは、本来、濁らないように、「たかあまはら」、或いは、「たかあまのはら」であり、これが連続する母音の短縮形として

「たかまのはら」と読まれた。時代が下り「たかまのはら」が転訛して「たかまがはら」となった訳である。当然、「たかまがはら」の読みは歴史的に新しい。聖なる世界としての高天原の訓みは、上代では清音であり、濁音の「たかまがはら」が流布していったのは中世(室町期)以降である。西宮一民は、上代人の「天」の結合単位について四型に分類したが、「天原」は「アマノハラ」であり、「アマガハラ」ではないこと、従って、「タカアマガハラ」という形はなく、「たかまがはら」との訓も本来なかったことを強調している。歴史関係の諸兄の多くが、近世以降の資料を渉猟して「高天原」を「たかまがはら」と訓み下し、結果的に多様な読み方を封じてしまっていることは極めて遺憾である。(以下次号)

(会員 大月短期大学)

ランドパワーの系譜(教材研究)

黒羽秀雄

今春ある会にてコメントをもとめられたので、このことを記します。

トランプ大統領の今後の世界政策の話題からロシアの政策はいかに?という展開になりました。そこで出席の方々に、まずある二人の人名をご存じか?ときいてみましたら、前者はそこそこ認知されておりましたが、後者は全く知らないということでありました。

ロシアの今後の動向を探る上でこの二人は不可欠な人物ゆえ(この二人はある共通のアイデアを継承しているものであり)ちようどよい機会ゆえ、この地政学上のアイデアが再び注目されようとしていることもあり、よき参考事例として解説したのであります。

前者のアイデアは、「コンチネンタル・ブロック」、後者は「ユーラシアニズム(ユーラシア主義)」と言われておりますが、実は私も約十年以上前に知人より送っていたいた後者の「書評」を読み、ロシアのユーラシア

に関するサイキ(精神)の流れの凄さを再認識したのでした。そして昨年(二〇一六年)に刊行された本のオビのキャッチフレーズと目次を見て、出るべくして出た本だと実感したのです。そのオビは「ソビエト帝国」の復活には、日本・イラン・ドイツとの同盟結が重要だ。千島列島は返還しよう。ただし、日米安保と引き換えに——とあり、又目次にあった第八章、アレキサンデル・ドゥーギンと第十一章、ハートランドを読んでみました。文脈の関連で先程の二人の方の後者が、このドゥーギン(ロシア人)です。又前者はハウスホーファー(ドイツ人)で彼は地政学の祖の一人、マツキンダー(英国人)のハートランド論を下敷にして独ソ日による大陸ブロックを提唱した人です。要はロシアの今後の大戦略(グランド・ストラテジ)は、マツキンダー・ハウスホーファーそしてドゥーギンと所謂地政学上のランドパワーの系譜につ

ながる流れにそったものなのです。

今後の参考の為に知人が送ってくれた「書評」と昨年に出た本につき記しておきます。

「書評」

アレキサンダー・ドゥーギン『地政学の基礎 ロシアの地政学的未来 空間をもって思考する』モスクワ、一九九九年。岩手県立大学教授、黒岩幸子評「岩手県立大学総合政策」第四巻第一号(二〇〇二年)93頁、101頁。

「本」

『ユーラシアニズム—ロシア新ナショナリズムの台頭』チャールズ・クロヴァー著 越智通雄訳 NHK出版 三五六四円 (会員)

五十音図の不思議

佐藤 健 二

たぶん平安の初期である。いろは歌と並んで五十音図が作られた。小学校入学と共に国語で「あいうえお かきくけこ」と五十音図を覚えさせられる。文字の世界、知の世界への第一歩である。

平泉澄博士によると、これを作った人は、大変な学者、それも悉曇学者であらうと云ふ。

『物語日本史 上』。悉曇といふのは古代インド語であるサンスクリットのこと、仏典の研究には欠かせない。これが五十音図の作成に大きな影響を与へたといふのである。

世界のあらゆる言語は構造をもつ。文法である。国語で五段活用(四段活用)とか、上一段活用とか習ったことを覚えてあるだらう。その文法であるが、それは五十音図がなければ説明ができない。縦の行(ア行・カ行・・・横の段(ア段・イ段・・・)この組み合わせで、活用語の語尾変化を説明する。書かず。書いて。書く。書くとき。書けば。書け。あるとき人はそこに法則があることに気づいた。それを気づかせてくれたのが五十音図である。

五十音図、そんなの知つてると言はずに、今一度これを唱へながら、五十音図の世界を発見した悉曇学者の感動を追体験してみるのも、無駄なことではあるまい。

(会員)

◎日本教師会第五十七回教育研究全国大会は八月五日(土)〜六日(日)に大阪市で開催されます。

研究主題は「道徳科の授業のあり方と課題」です。場所、日程等の詳細は前号をご覧ください。

皆様のご参加をお願いします。

◎「東京の教育」への会員の皆様からのご投稿をお待ちしています。

事務局アドレス(佐藤)

komasato@juno.ocn.ne.jp